Geschichte
歴史

交流の始まりと国交樹立
江戸時代まで（～1868）

鎖国が厳しかった江戸時代にも、国交のあったオランダを通じて、日本を訪れたドイツ人がいました。徳川綱吉にも謁見した博物学者エンゲルベルト・ケンペルの見聞記『日本誌』（1727）は、欧州での日本のイメージに影響を与えました。19世紀前半にはオランダ商館医だったフランツ・フォン・シーボルトが、日本の西洋医学の進歩に貢献した一方で、日本の風土や動植物を広範囲に研究しました。

オイレンブルク伯爵

幕府が開国政策に転ずると、1860年にオイレンブルク伯爵率いるプロイセン使節団が、日本を訪問。翌1861年1月24日に日・プロイセン修好通商条約が締結され、日本とドイツの150年におよぶ国交が始まったのです。

近代国家・日本の模範として
明治時代（1868～1912）

森鴎外

1871年、プロイセンを中心としてドイツの統一が実現しました。明治維新から間もない日本にとって、ドイツは「近代国家」として歩み出したという共通点があり、法制、軍事、科学・芸術など様々な分野で模範となる国でした。

欧米に派遣された岩倉使節団が1873年、ドイツ帝国宰相ビスマルクに謁見したのに続き、1882年には伊藤博文らが憲法学者グナイストらの講義を受け、大日本帝国憲法の起草にあたってプロイセン憲法をお手本としました。現在に至るまで、日本の民法や刑事法などの法律は、ドイツの法制の影響が残っています。

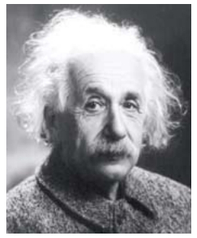
近代化を目指す日本には、多くのドイツ人研究者が招かれ、法学・医学などの分野で教鞭をとりました。「ナウマンゾウ」で知られる地質学者ハインリッヒ・エドムント・ナウマンや、『君が代』に伴奏を付けた作曲家フランツ・エッケルトが「お雇い外国人」として知られています。日本在住のドイツ人により、1873年には東京に「ドイツ東洋文化研究協会」が設立されました。軍の士官候補生や医学生など、ドイツに留学する日本人も多くいました。陸軍軍医として留学した森鴎外が、ドイツでの体験をもとに小説『舞姫』を執筆したことは有名です。北里柴三郎はベルリン滞在中に、世界で初めて血清療法を開発して、第1回ノーベル賞の候補となりました。また、ライプチヒの市立音楽院で学んだ作曲家の滝廉太郎は、日本初のピアノ留学生です。

二度の大戦を乗り越えて
大正・昭和前半（1912～1949）

バウムクーヘン
（写真提供：株式会社ユーハイム）

第一次大戦が勃発すると、日英同盟を理由に日本はドイツに宣戦し、租借地だった中国の青島などを占領しました。その時に捕虜となったドイツ兵士によって、日本にバウムクーヘンやソーセージ等がもたらされました。

国交再開後は学術交流が盛んになり、哲学者の三木清や田辺元ら多くの学生が留学。ドイツからはノーベル賞科学者のアルベルト・アインシュタインやフリッツ・ハーバーが来日しました。当時、製薬会社を経営していた星一は、敗戦で財政的に困っていたドイツの科学研究を支えるために、私費を投じてハーバーらの援助を続けました。


アインシュタイン
（米国議会図書館所蔵、Oren Jack Turner撮影）

1930年代に、ナチス・ドイツと日本は政治的な側面から急接近しました。イタリアを含めた三国で軍事同盟を結んで第二次大戦に突入しますが、1945年に敗戦を迎え、ドイツは東西に分裂したのです。

統一ドイツと共に歩む未来
昭和後半・平成（1950～）

戦後、日本と西独は国交を樹立し、奇跡的な経済復興を遂げます。両国は緊密な関係を築き上げ、1985年にベルリン日独センター、1988年には東京にドイツ日本研究所が開設されました。日本と東独の間にも外交関係が結ばれますが、1990年の東西ドイツ統一によって、全ドイツとの関係に統合されました。

日本にとってドイツは欧州最大の貿易相手国であり、21世紀に入って日独関係はますます重要なものとなっています。政治・経済面での協力はもちろん、文化・学術分野でも市民レベルでの活発な活動が行われており、交流150周年を契機にして友好関係をさらに深めていくことが期待されています。

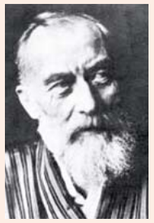
日独首脳会談（写真提供：内閣広報室）

独逸話 1
日本をお手本にしたマイセンの磁器

昔からヨーロッパでは、遠く日本や中国からもたらされる磁器は「白い金」と呼ばれ、王侯貴族の富と権力の象徴でもありました。自国で美しい磁器を作れないものかと、ザクセン公国の王に命じられた錬金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベトガーが、18世紀初めに欧州で初めて白磁の磁器の製法を解明したとされています。有田焼の影響を受けた初期の絵柄から、ヨーロッパらしいデザインまで、マイセン磁器は日本でも幅広く愛好されています。

独逸話 2
ベルツ教授と草津温泉

1876年から1905年まで日本に滞在したエルヴィン・フォン・ベルツは、東京医学校（現在の東京大学医学部）にて教鞭を執り、皇族方の拝診にあたりました。日本の近代医学の発展に貢献し、「蒙古斑」を命名したことでも知られています。ベルツは草津温泉の成分を研究して温泉療法を提唱し、「草津には優れた温泉のほか、最上の空気と理想的な飲料水がある」と、その名前を国内外に広く紹介しました。また、彼は日本の伝統的武術にも関心を持ち、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎らと交流を重ね、柔道の近代的発展に大きな影響を及ぼしました。


ベルツ

独逸話 3
板東俘虜収容所とベートーベン第九

第一次大戦期、徳島県鳴門市の板東俘虜収容所では、ドイツ人捕虜が人道的な処遇を受け、文化・経済活動や地元住民との交流も許されました。年末の風物詩となったベートーベン「第九」が日本で初めて演奏されたことでも有名です。

ドイツ兵捕虜たちによる音楽会
（写真提供：鳴門市ドイツ館）

独逸話 4
日本サッカーの礎を築いたクラマー

W杯優勝3回を誇るサッカー大国であるドイツから1960年、デットマール・クラマーが日本代表チームのコーチに招かれました。彼が育成した選手たちは東京五輪でベスト8、メキシコ五輪で銅メダルを獲得。国内リーグの発足にも貢献したクラマーは「日本サッカーの父」と呼ばれます。

1970年代に活躍した奥寺康彦に続き、ドイツのプロリーグでプレーする日本人も増えています。

©GNTB/Stuttgart-Marketing GmbH

日本とドイツ交流史（1861~2011）

1861	日・プロイセン修好通商条約締結
1868	明治維新
1871	ドイツ帝国成立
1914	第一次世界大戦始まる
1918	ドイツ革命、ワイマール共和国成立
1945	第二次世界大戦終結
1949	西独、東独の成立
1955	ドイツ連邦共和国（西独）と外交関係樹立
1972	ドイツ民主共和国（東独）と外交関係樹立
1985	ベルリン日独センター開設
1990	東西ドイツ統一
1993	天皇皇后両陛下御訪独
1997	ヘルツォーク大統領訪日
1999/2000	「ドイツにおける日本年」開催
2000	ワーキング・ホリデー制度が開始
2002	ラウ大統領訪日
2005	ケーラー大統領訪日
2005/06	「日本におけるドイツ年」開催

（写真提供：ジーケージャパンエージェンシー株式会社、ページ左上写真も）

ページ上段：横浜港に停泊する「アルコナ」号、カール・フォン・アイゼンデッヒャーによる水彩画（ボン大学日本文化研究所所蔵、トラウツコレクション）